

# Museum News



絵：柳田基

## 2021 展覧会

### 企画展

#### 第45回

#### キリスト教美術展

2021.10.16(土)▶12.18(日)

※詳細は4ページをご覧ください。

### 平常展

#### 大学昇格をめざして

#### 一新天地上ヶ原へー

#### 特集陳列

#### 染織品の修理

2022.1.17(日)▶4.23(日)

### 平常展

1929年3月、関西学院は創立の地である原田の森を去り上ヶ原へやってきました。この移転の背景には、高等学部学生会を中核として活発化した大学昇格運動がありました。当時の院長であるC. J. L. ベーツの働きに注目しながら、大学昇格とキャンパス移転にまつわるエピソードをご紹介します。

### 特集陳列

博物館の資料はその品質や形状などすぐに展示できる状態で収蔵されるものばかりではありません。損傷のあるものは修理を施し、そうでないものも安全に展示できる状態に整えてから展示室で陳列、公開します。博物館が行う資料保存の一部を当館の古代アンデス染織品コレクションを例にご紹介します。

## 大学博物館の将来に向けて

### コロナ禍の1年半

2020年の春から全世界で急速に拡大した新型コロナウイルス感染症の影響は、あっという間に大学博物館にも及びました。休館の措置に伴い企画展や平常展の開催が延期され、『博物館通信』の発行も、ほぼ半年遅れることになりました。2020年9月からは展示が再開されましたが、キャンパスへの学外者立ち入り禁止の措置をうけて、1年半が経過した現在も来館者は学内関係者に限られています。

### 基本姿勢の問い直し

このような不自由を強いられるなかで、わたしたちは、これまで何の疑問も持たずに自動的に処理してきた作業を再開し、継続することの意味を問い直しはじめています。今は今回の経験をもとに新しい博物館のあり方を考え、将来を展望する時期なのかもしれません。

そのようなことを考えていた矢先に、今年の7月30日付で文化審議会博物館部会から「博物館法制度の今後の在り方について（審議経過報告）」が公開されました（[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/hakubutsukan/pdf/93293401\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/hakubutsukan/pdf/93293401_01.pdf)）。

### 文化審議会からの報告

現在の博物館法は1952年に施行されました。この法律については、実態からの乖離や現代的課題への対応の必要性がこれまでも多く指摘されてきました。今回の報告は、これらの指摘に応えようとするものです。

また、この報告書には、感染症の拡大と、それに伴う施設使用への制限措置がもたらした深刻な影響にも言及があります。「この状況は、私たち人類にとって、実物(もの)に触れる感動と、実物(もの)を仲介として他者(ひと)と対話し、文化芸術について学び合うことがいかに

重要なことであるかを確認する機会ともなった」。「……一連の経験は、博物館の本質的な価値を改めて認識する契機となった一方で、これまで博物館が緩やかに対応を迫られつつあった課題を浮き彫りにし、課題への対応を喫緊のものにした」。

このような状況を念頭に、この報告書では、博物館の基本的使命と、今後必要とされる機能が次の5つにまとめられて提示されています。「まもり、うけつぐ」 資料の保護と文化の保存・継承

「わかちあう」 文化の共有

「はぐくむ」 未来世代への引継ぎ

「むきあう」 社会や地域の課題への対応

「いとなむ」 持続可能な経営

### 大学博物館のさらなる進化のために

わたしたちにとって、収集・保管・展示・教育、調査・研究という博物館として最も基礎的な作業を継続することで、関西学院大学が形成してきた文化的伝統を保存・継承していくことが、おそらく何よりも重要だと思われます。「実物(もの)に触れる感動と、実物(もの)を仲介として他者(ひと)と対話する」ことは、わたしたちが何よりも重視すべきことです。

それとともに、わたしたちは、過去を学び、現在を理解し、さらに未来を見通すためにも、自らのアイデンティティを大学と共有し、学術研究と学生教育のための連携を今以上に進めていかなければなりません。

幸い、次ページ以降にご報告いたしますように、今では平常展も企画展も復活しました。来年度以降に向けて、上記の課題に取り組む新たな企画への提案も出ています。今後の大学博物館の、さらなる進化のためにも、皆様からのご支援をよろしくお願ひしたいと思います。

(大学博物館長 加藤哲弘)



# 展覧会報告 I

## 平常展

### アメリカ カナダ 日本 関西学院を築いた米・加・日の人々

学院の創立から大学昇格までの流れを軸に、アメリカ、カナダ、日本の人々が協力して学院を築き上げていく様子をご紹介します。

2021.3.15(月) ▶ 5.15(日)

10:30 ~ 16:00

※休館：土曜日、日曜日、祝日、3.23(火)、4.29(金)、5.3(月) ~ 5.5(水)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、

本学学生・教職員のみ入館可

開館日数 47日



神学館を背に立つ教員たち（1923年）

## 神戸・原田の森にて

### 学院の誕生

1889年、アメリカ・南メソヂスト監督教会は、伝道者養成と青少年へのキリスト教主義教育を目的として、神戸の東にある「原田の森」（現在の王子動物園所在地）に関西学院を創立します。創立には、初代院長となったW. R. ランバスらアメリカ人宣教師のほか、後に第2代院長となる吉岡美国など複数の日本人も協力しました。

1889年に兵庫県知事に提出された「私立関西学院設立御願と認可状」を見ると、学院の設立者は日本人の中村平三郎名義になっています。彼はランバスの伝道で導かれ、学院に携わることになった人物です。設立当初、実質的に外国人経営であった学院を代表して、中村は日本政府や日本人教職員との交渉を担当する院主ならびに幹事としての職責を担いました。

展示では、創立間もない頃の経済的に貧しい学生のために、吉岡美国が顧問を務めた自助会についてもご紹介しました。自助会では郵便配達などのアルバイトのほか、自ら乳牛を飼育し、神戸市内で販売していたのです。当時使われていた「関西学院自助会牧乳搾取販売所神戸」と彫られた印は現在も学院史編纂室に保管されています。

## カナダ・メソヂスト教会の参画

### 学院の発展

1910年にはカナダ・メソヂスト教会が学院の経営に参画したことで、資金面と教師陣が強化され、小さな私塾に過ぎなかった関西学院は大きく発展していきます。



展示室の様子（全体）

ここでは建築物の建設や新学部の開設が可能になったことがうかがえる「私立関西学院校地、校舎、寄宿舎変更二付開申」という1911年の文書を展示しました。この開申にある新校舎とは神学館のことで、これは学院におけるW. M. ヴォーリズ建築の第一号です。

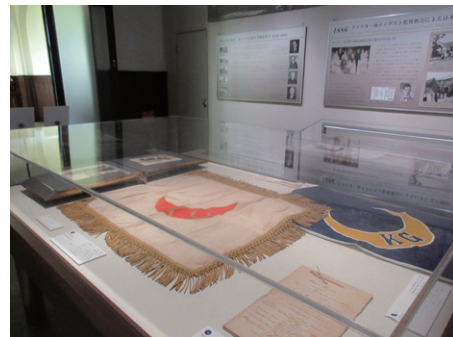
高等学部（商科・文科）の学生を募集するポスター（1914-16年）からは、人格教育と外国語教養が当時の学院の特色であったことがわかります。初年度は100名の募集に対し、集まったのは40人ほどでした。

## 「K. G. ブルー」ではなかった

### 学院最初のスクールカラー

学院最初のスクールカラーは、現在大学が「K. G. ブルー」と呼ぶ紺色ではなく、赤色と白色でした。英語研究部（ESS）の前身である英語会による機関紙 *The Maya Arashi* には、スクールカラーの色が決められた経緯が紹介されています。これによると白は清らかさ、罪のないこと、誠実さを表し、赤は真心、熱意を表しています。普通学部教員のM. V. ガーナーやS. H. ウェンライ

ト普通学部長などが協議してこれを決めました。展示では、このスクールカラーを用いた旧制中学部の校旗（1929-1947年）をご紹介します。この校色は現在も（新制）中学部と高等部に見られます。



展示室の様子（旧制中学部の校旗）

## 原田の森から上ヶ原へ

### 大学昇格とキャンパス移転

学院では1919年から大学昇格運動が活発化します。それにともないキャンパスの移転についても話し合われました。原田の森キャンパス周辺の市街地化が進み、学びの場としてふさわしくないと考えられたことが移転の一因です。1919年に学生総会が大学昇格を推進する決議をしたことがわかる「大学昇格決議文」や、1928年2月29日举行的上ヶ原キャンパス起工式についての記事がある『関西学院学報』（1928年）から当時の様子をご紹介します。

この展示期間中は新型コロナウイルス感染症の対策のため、入館は学内者に限られていました。感染症の収束を願いながら、これからも安全な方法で展示活動を続けていきたいと思ひます。



# 展覧会報告 II

## 企画展

### バリ 布の万華鏡 —布が伝える美のこころ—

バリ伝統衣装研究家の武居郁子氏が所蔵する布のコレクションを紹介しました。

前期 2021.5.31(月) ▶ 6.30(水)

後期 2021.7.2(金) ▶ 8.6(金)

9:30 ~ 16:30

※日曜日、祝日、7.1日は休館

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、  
本学学生・教職員のみ入館可

開館日数 58日

入館者数 762人



#### 展示内容をご紹介

### バリ 布の万華鏡

バリ伝統衣装研究家であり、コレクターでもある武居郁子氏のコレクションから約70件の布と装飾品をお借りし、バリの服飾文化を紹介する展覧会を開催しました。本展覧会は新型コロナウイルス感染拡大防止措置として入館者を学内者に限定して開催しました。会期中に学外の多くの方に見ていただくことができなかったため、ここでは展覧会の様子を少しだけ紹介します。

展覧会は1章「布の万華鏡—バリ島の染織—」、2章「かざり」、3章「布をまとう」の3章で構成しました。インドネシアは世界最大のイスラム教国ですが、バリ島は島民の9割が土着の文化と融合したヒンドゥー教を信仰しています。バリのヒンドゥーは儀礼を重んじ、毎日の生活が祈りとともにあります。バリ島の生活は布とともにあるということがよく言われますが、バリの人々は1日の中に必ず祈りの時間を持ち、祈りの前に水を浴びて身体を清め、腰巻と帯の二つの布をまとして身なりを整えます。また生まれてから亡くなるまでの間に様々な儀礼を経験し、そこでは儀礼ごとに定められた布をまっています。1章ではこのような日々の暮らしの中で身につける布、儀礼で用いる布などバリ島で着用される布の数々を展示しました。代表的なものは、バリ島の先住民であるバリ・アガのトゥンガナン村でのみ織られる経緯緋のグリーンシン、ジャワ島で染められてバリ島に持ち込まれるパティックと呼ばれる縹緋染の更紗、美しい紋織のソケット、印金を施した布であるプラダ、緯緋のイカット（エンデックとも呼ばれる）



バリの布展示風景

といった布があります。それぞれに色合いや風合い、技法が異なるものですが、いずれの布も織物の織り方（組織）は平織という最も単純な組織で織られています。平織は経糸と緯糸を交互に上下に交差させただけの織物です。しかしバリの布はたった一種類の単純な組織で織られているとは思えないほどに糸の染め方や色糸の入れ方、糸間の間隔のあけ方を工夫し、各布が全く異なる姿を見せてくれます。この章では布自体の美しさをご覧いただきながら、それらの布がどのような場面で使われているのかを武居氏の調査写真とともに紹介しました。

2章は布とともに身につける装身具を主に陳列し、バリ・アガの村特有の冠や簪、生と死にまつわる儀礼で用いる装身具、婚礼時に装着する髪飾りを見ていただきました。この章の見所はマディアスタイル（3つあるランクの中位）の婚礼髪飾りで、髪に1本ずつ簪と生花をさし、花冠のように仕上げるというものです。展示室ではインドネシアの伝統衣装着付師の資格を所持している武居氏が花嫁の頭に見立てたマネキンに簪をさして形作った姿を見ていただきました。

布は広げれば薄く平らなものですが、身体に

巻きつけることで立体的な衣装へと変化します。3章ではトルソーに布を着せつけ、布の巻き方やコーディネートを実地での着装写真とともに紹介しました。武居氏の協力で着装姿を実見できる貴重な機会となりました。

また本展覧会では感染防止のためギャラリートークなどのイベントを開催することができず、代替措置として武居氏による展示解説動画を作成し、展示室入口で放映しました。バリ・アガの祭礼の記録映像など貴重な資料も交えながら解説していただきました。

#### 一枚の布をまとう暮らし 布に包まれて時を紡ぐ

### 講演会「儀礼を彩る布 バリ島の伝統衣装を収集して」

会期中の7月30日（土）には国際服飾学会との共催で武居氏と高木（当館学芸員）の対談形式でオンライン講演会を開催しました。画像だけではわかりづらい布のスケールや巻き方を実演しながら解説くださり、布の産地、種類、思い入れのあるコレクション、バリの布を調査するようになった経緯や苦労話をわかりやすく、楽しくお話いただきました。講演の最後に武居氏から「昔ながらの手の込んだ織物が消失しつつある中で伝統美は変わることなく次世代に伝えていきたい」、「現地に生まれた人ではなく外から眺めるからこそ見えるものがあり、中立的な立場で色々な村の調査と記録を行うことができる」という言葉がありました。博物館に携わる者として資料の保護や研究姿勢を考える機会になり、心に刺さる印象的な言葉でした。



## 開催中の企画展

### 第45回

# キリスト教美術展

2021年10月16日(土)～12月18日(土)  
 ※休館：日曜日、祝日(ただし11月14日回は開館)

キリスト教美術協会によって1973年から開催されてきた「キリスト教美術展」が今年第45回を迎えます。これを記念し、来年開催される東京展(於 銀座教会・東京福音会センター、キリスト教美術協会主催)を前に関西学院大学博物館との共催で関西展を開催します。キリスト教美術協会はカトリックとプロテスタントの二つの美術展の合同によって超教派の美術協会として1972年に設立されました。キリスト教美術の定義はさまざまですが、現在のキリスト教美術協会では伝統的なキリスト教の画題をテーマにした作品、あるいは作家自身がキリスト教の信徒であることに限定せず、作品制作の根底にキリスト教の精神性と呼応するものがあればよいという考えに基づいて活動しています。第45回展では、現在活躍中の作家に加え、キリスト教美術協会の活動を支援してきた物故作家の作品を展示します。

とりわけ関西展では、協会の創始者のひとりである田中忠雄の《弟子の足を洗う》(油彩1957年)をはじめ、関西学院所蔵の渡辺禎雄《ノアの箱舟》(型染版画1984年)、堀江優《お前は、神の子、メシアなのか。》(水彩1976年)、鴨居玲《空に叫ぶ》(油彩1978年)、小磯良平《聖書より》(油彩1960年)を出品します。さまざまな技法とテーマで創造されたキリスト教美術をお楽しみください。

#### 関西展出品作家一覧

※東京展とは出品作家、作品が異なります。  
 田中忠雄/渡辺禎雄/堀江優/鴨居玲/小磯良平/  
 アルベルト・カルペンティール/荻太郎/  
 五十嵐芳三/蝦名協子/大久保豊/太田久/  
 竹内一/續橋守/中嶋明/中野耕司/早矢仕素子/  
 林田滋/東浦哲也/松岡裕子/眞野眞理子/  
 宮地明人/森田やすこ



渡辺禎雄《ノアの箱舟》1984年、型染版画



鴨居玲《空に叫ぶ》1978年、油彩



大久保豊《祈り》2021年、蜜蝋油彩



林田滋《冬の言葉》2019年、石彫



関西学院大学博物館通信 第11号  
 KGU MUSEUM NEWS No.11  
 2021.10.20  
 関西学院大学博物館  
 〒662-8501  
 西宮市上ヶ原一番町1-155  
 TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462  
 URL <https://www.kwansei.ac.jp/museum>